宮本武蔵

剣豪・宮本武蔵（1584-1645）の生涯について、はっきりしたことは分かっていません。兵庫県の播磨国に生まれた武蔵は、13 歳の頃に新当流の剣豪・有馬喜兵衛を相手に勝利したのを手始めに、29 歳までに 60 回の決闘で勝利したと主張しています。これにより、「武者修行」で日本各地を放浪し、独自の二刀流の技を磨き、他の剣豪に挑戦して自分の優位性を証明していくという、武蔵の人生の流れが決まりました。1614～1615 年の大坂の陣では徳川幕府と対峙する豊臣秀頼（1593-1615）を助け、1637 年の島原の乱では徳川幕府の鎮圧に貢献した可能性がありますが、歴史家もはっきりしたことは言えません。

晩年の武蔵

武蔵と熊本との関わりは、1640 年に肥後国の細川家初代藩主・細川忠利が、おそらく剣術を教えるために彼を熊本に招いたのが始まりです。その頃すでに 50 代後半になっていた武蔵は、瞑想、絵画（水墨画、書道の名手でもありました）、著作に多くの時間を費やしていました。余命を悟った武蔵は霊巌洞で隠遁し、『五輪書』を書き上げました。『五輪書』とは、「土の巻」「水の巻」「火の巻」「風の巻」「空の巻」と題された 5 つの章で剣術と人生の哲学を述べた作品です。彼は 1645 年にこの本を完成させ、同年に亡くなる前に、弟子の一人である寺尾孫之丞に原稿を渡しました。言い伝えによると、死んでも主君を見守ることができるよう、熊本に通じる道に鎧を着込んで直立した状態で埋葬されたたと言われています。